「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター　　執筆担当：斎藤登美夫

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

◇◆◇　No.0863　◇◆◇　　25/10/22

【　米国に広がる新たな「金融リスク」に注意　】

昨 21 日、第 104 代の内閣総理大臣に高市早苗氏の就任が正式決定した。憲政史上初めての女性首相となる。そんな高市首相は、来週にも来日するトランプ米大統領との首脳会談が予定されるなど、就任早々難しい舵取りを迫られそうだが、是非とも頑張っていただきたいと思う。
一方、政治的なゴタゴタに薄日が差してきた感のある日本を横目に見つつ、米国も不安材料が目白押しの状況だ。そのうちのひとつ、1 日から続く「米政府機関の閉鎖」問題は、ハセット米国家経済会議委員長が「今週中に終了の公算が大きい」と発言。さらに、「終了しなければ強力な措置を検討する」と述べており、懸念が幾分後退した感があるものの予断を許さない。また、別の視点から新たな「懸念要因」が浮上した感があるところも気掛かりだ。

◎CDS スプレッドをみても、金融市場は落ち着いているが・・・

2008 年ごろ、米国で「サブプライムローン危機」と言われる住宅危機が発生したことがある。これがその後の、いわゆる「リーマンショック」のトリガーを引いたとも言われていることは周知のことだろうが、筆者はその当時から「危機は住宅だけにとどまらない」――と指摘。続けて、「次は学生ローンそして自動車ローンが危ない」と折につけ警告を発してきた。

しかし、15 年以上経過しても結局何も起こらず。さすがに「オオカミ少年」と化しつつあるなか、筆者的に言えば「ようやく『自動車ローン問題』が表面化したか」ということになる。
そうしたなか、現地の報道などを見ても、まだ楽観的に捉えている向きが多い感は否めないが、為替をはじめとする金融市場に与えるリスクについても是非頭に入れておいていただきたいと思う。

まずは、2008 ごろに起こった「サブプライムローン危機」を簡単に振り返っておくと、信用度の低い個人（サブプライム層）に向けた住宅販売の際について、担保としていた証券化された「抵当権」が焦げ付いたことに端を発する。つまり、住宅価格が無条件に右肩上がりしていた時代はよかったが、ピークを迎えたあと下降に転じると仮に住宅を売却してもローンの全額を返済し切れない不良債権が発生。結果として金融機関やノンバンク、投資ファンドなどが多大な損失を被る格好になった。
そして、それが世界的な信用収縮、貸し渋りどころか「貸しはがし」と呼ばれるような事態も引き起こしたことは記憶にいまだ新しいだろう。

一方で、ここ最近発覚した「自動車ローンをめぐる信用不安」も、基本的にはほぼ同じ構造だ。入り口は前述した「住宅」の部分を「自動車」に変更しただけといっても、大きく間違ってはいない。
いずれにしても、そんな「米自動車ローン危機」をめぐり、テキサスに拠点を置くトライカラー・ホールディングスをはじめとする、すでに幾つかの会社が経営破たんに追い込まれているだけでなく、さらに一部の米地銀にも飛び火しているようだ。たとえば、「経営破たん」にまでは至っていないが、西部ユタ州の地銀ザイオンズ・バンコープは子会社を通じて行った融資をめぐり 6000 万ドルもの引当金を計上すると発表。同アリゾナ州のウェスタン・アライアンス・バンコープも、一部融資で不正の疑いがあると発表し、経営への影響についても言及していた。

米株の動きをみると、先でも指摘したように、まだそこまで悲観的、強い警戒感はないと言わざるを得ない。「仮に問題が大きくなっても当局が流動性供給などに動き対応する」――といった他力本願的な考えも根強く取り沙汰されていることに加え、NY筋の話だと前述したザイオンズなどの事例は「基本的に単発のモノ」との認識が広がっているためだという。実際、クレジット・デフォルト・スワップ（CDS）スプレッドの面から見ても、過去の金融危機のような動きはいまのところ見られず、落ち着いた動きにとどまっている。

とは言え、先週初めに大手金融機関JPモルガンのダイモン最高経営責任者（CEO）が、「ゴキブリは 1 匹いたら、おそらく他にもいるものだ。だから皆、事前に警戒すべきだ」――と揶揄。他社への広がりなどに懸念を示すと同時に金融市場の楽観論に警鐘を鳴らしていたことには、素直に耳を傾けるべきという気がしている。

FX Investor

そもそも論として、筆者もまったく同じ意見であり、まさに油断は禁物だろう。さらに気になるのは、日本勢の「高市トレード」の影響などもあってか、日本株はもちろんNYダウなどの米株もここ最近は不自然なほど高値圏で推移していることだ。つまり根拠の乏しい楽観論、いわゆるユーフォリアによってもたらされた「バブル」の様相を呈しつつある気がしてならない。そしてこれは、株式だけでなく為替市場においても同じようなことが言えそうだ。

だとすれば仮に第 2、第 3 のザイオンズなどが現れた場合のダメージは、やはり甚大なものとなる公算が大きい。溜まっていたロングポジションのパニック的な売りとなる可能性も予想され、最悪の場合には売りが売りを呼ぶ展開も。リスク管理の観点から、続報などを含めしっかりとアンテナを張り巡らしておいて損はないと思っている。（了）

▼▲

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。
なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

◆◇◆　Copyright （C） fx-newsletter limited company All Rights Reserved　◆◇◆

FX-newsletter